

鹿大ジャーナル

鹿大広報

鹿児島大学が発信する最先端情報マガジン

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/>

特集

「オール鹿大」体制で駆けた6年間
〜前田芳實学長体制の鹿大を振り返る〜

06 潜入ルポ 〜学びの部屋〜

こころとからだの不思議を探る 脳科学へのいざない

大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
桑木 共之 教授 / 柏谷 英樹 講師 / 楠本 郁恵 助教 / 山下 哲 助教

08 先輩からのメッセージ

OG: 錦江町 副町長 三反田 みどりさん

10 研究室からSCHOLAR INTERVIEW

ドイツにおけるブッククラブの軌跡と功罪について解明 法学部人文学科 多元地域文化コース 竹岡 健一 教授

人をまもり、自然をまもり、美しい自然環境を次世代へ
水産学部水産学科 水産生物・海洋学分野 西 隆一郎 教授

14 鹿大トピックス

かぎん未来創造プランコンテストで 学生・大学院生が大賞等を受賞 ほか

19 進め! 鹿大生

歯学部生としての経験と意欲から 生まれた課題解決型プランを提案

歯学部歯学科4年生 尾林 莉咲さん

さつつんが行く!

総合研究博物館標本収蔵庫

「オール鹿大」体制で駆けた6年間

前田芳實学長体制の鹿大を振り返る

平成31年3月31日をもって、前田芳實学長が退任します。今号の特集では、前田学長が中心となり取り組んだ「第2期中期目標・中期計画」～「第3期中期目標・中期計画」にわたる2期6年間の任期中に達成した目標や成果など、学長のコメントをもとに、鹿児島大学の6年間で振り返ります。

◆全学的な組織や教育改革

平成27年、学術研究院を設置し、平成29年には教育を一体的に推進する総合教育機構、研究を一体的に進める研究推進機構を設置しました。そして昨年、地域と大学を結ぶ南九州・南西諸島域共創機構を設置しました。地域課題を受け入れる窓口を一本化したということです。今後、本学と地域が手を携え、地域の課題解決へ向けた取り組みを、より親密に推進することができるものと期待しています。

私が学長に就いてからP-SEG (Educational Program for Spirit of Enterprise in Global Contexts: 進取の精神グローバル人材育成プログラム) というプログラムを作りました。これが本学のグローバル教育のベースになっており、このプログラムをもとに学生の海外研修、海外留学が推進されています。

◆グローバルな視点を有する地域人材育成の強化

全国で国立大学がイノベーションを通じ、地方創生につながる教育改革を進めています。その中でも鹿児島大学はさまざまな取り組みを推進してきたと思っています。

そのほか、法文学部、教育学部、農学部および理工学研究科の改組、共同獣医学研究科の設置を行いました。また、最先端の設備を誇る総合動物実験施設を設置し、全国の国立大学として初めてとなる国際実験動物ケア評価認証協会(AAALAC)の認証を取得しました。将来、共同獣医学部だけではなく幅広い生命科学分野の実験施設として活用されることとなります。平成31年度には、農学研究科と水産学研究科とを統合した新しい形の教育組織である農林水産学研究科が設置されます。

◆地域に貢献する大学として

平成28年には、1年かけて南北600kmにわたる県内全域の市町村の首長さんを訪問しました。目的は、本学についてご理解いただくと同時に、地域に貢献する本学の意欲をお伝えすることです。大学正門の正面に「南北600kmこれが私たちのキャンパスです」というスローガンを掲げていますが、あれはまさに県下南北600kmを踏破した実績から出てきた言葉なのです。

学生を海外へ派遣する経費を捻出する手立てとして鹿大「進取の精神」支援基金を創設しました。基金創設に当たっては教職員、同窓生、地域の企業や産業界の方々のご協力をいただき、5年間で2億5千万円という目標も達成の目途がつかまりました。留学生、研修生を送り出すほか、海外からの留学生が本学で学ぶことのできる環境づくりもこの経費で賄っています。募金をお願いするにあたって、私自身、年間50〜60社の企業を直接訪問しました。温かくお迎えいただき、大学と地域社会とのつながりが非常に密接になったという印象があります。地元の産業界の方々の熱心で温かいご支援に心より感謝しております。

訪問先の首長さん方からは、本学の卒業生を採用したいという声を多数いただきました。世の中の変化に対応し、新しい時代を創る人材が求められていることを実感しました。私の方からは、採用試験を受ける前に市町村の実態を理解させてもらうため、インターシップを受け入れてほしいとお伝えしました。学生にとって、就職する前に地域や人の暮らしの実態を知ることが非常に大切なことです。過疎・高齢化が進み、休耕田がたくさんある地方の実態を学生には知ってほしいのです。現在、いくつかの市町村では、学生のインターシップを受け入れる計画を進めてくださっています。

地方に貢献する大学としてのもう一つの大きな取り組みは、奄美群島拠点の整備です。法文学部では平成16年から奄美サテライト教室を開設しています。その第2弾として平成27年、国際島嶼教育研究センター奄美分室を設置しました。さまざまなシンポジウムや研究会、講演会を行っており、奄美サテライトとともに奄美市や市民とのつながりが濃厚になったと思います。来年度は袖会館のフロアに移転する予定で、より広いスペースを活用できます。「鹿児島大学の奄美キャンパス」という気持ちで地域の方々に自由に訪れてもら

◆教育(全学的教育改革)

- 総合教育機構の設置 (H29)
- 学部・研究科の改組
 - ・農学部改組 (H28)
 - ・理工学研究科(博士後期課程)改組 (H29)
 - ・法文学部改組 (H29)
 - ・教育学部改組 (H29)
 - ・教職大学院設置 (H29)
 - ・共同獣医学研究科設置 (H30)
 - ・農林水産学研究科設置 (H31)
- 教育体制等
 - ・地域人材育成プラットフォームの開設 (H29)
 - ・自己推薦型入試の導入決定 (H29)
 - ・ベストティーチャー賞の授与 (H30)

◆教育(グローバル教育)

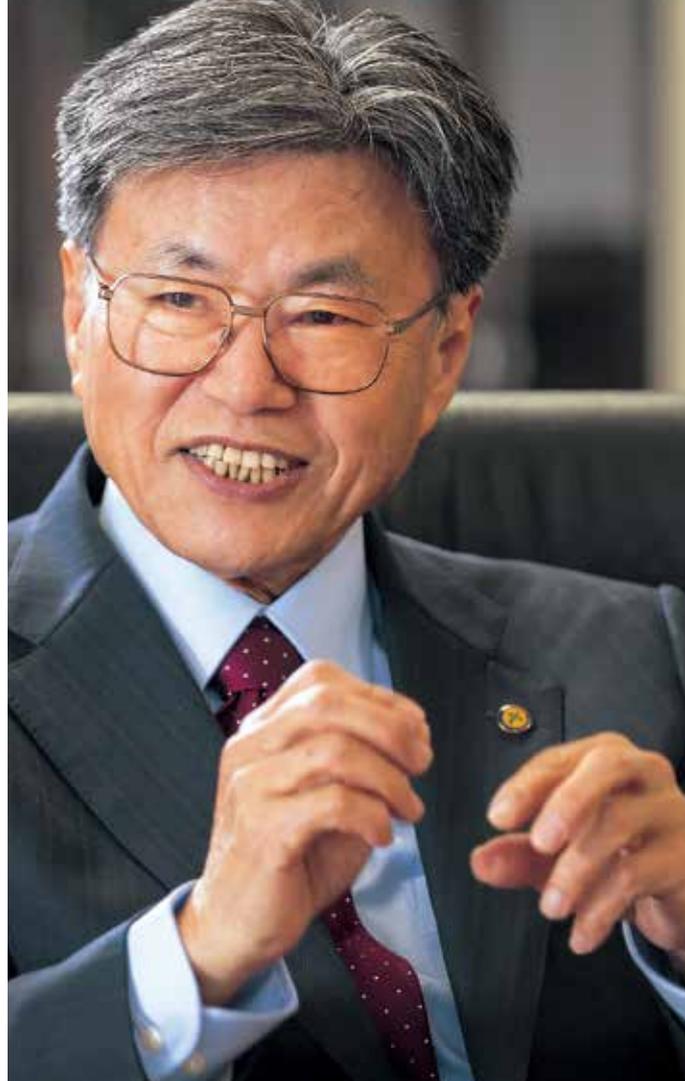
- ・鹿児島大学学生海外学会発表支援事業の創設 (H26)
- ・進取の精神グローバル人材育成プログラム (P-SEG)

- の実施 (H26)
- ・トビタテ!留学 JAPAN 日本代表プログラム応募指導の支援 (H26)
- ・新しい英語eラーニング教材の導入 (H27)
- ・国際バカロレア入試の導入 (H29)
- ・国立大学初の取り組みとなる外部英語試験の全学的導入 (H29)
- ・グローバルセンターの設置 (H28)
- ・鹿大「進取の精神」支援基金 学生海外派遣及び留学生受入事業 (H28)
- ・国際化の基本方針の策定 (H29)
- ・鹿児島大学21世紀版薩摩藩英国留学生派遣事業「UCL 稲盛留学生」の創設 (H30)

◆地域連携(社会人教育と地域連携)

- 地域ニーズに応じた人材育成
 - ・鹿児島大学生涯学習憲章の策定 (H25)
 - ・地(知)の拠点整備事業 (COC)の採択 (H26)

- ・地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+)の採択 (H27)
- ・全学必修科目「大学と地域」の開講 (H28)
- かごしまルネッサンスアカデミー 履修証明プログラム
- 南九州・南西諸島域共創機構の設置 (H30)
- 地域連携
 - ・奄美群島拠点の整備 (H27)
 - ・学長自らが県内の全市町村長と会談 (H28.1~11)
 - ・鹿児島商工会議所との包括連携協定を締結 (H28)
- 稲盛和夫鹿児島大学名誉博士(京セラ名誉会長)
 - ・稲盛和夫名誉博士立像建立 (H29.3)
 - ・稲盛和夫名誉博士より、京セラ株100万株の寄贈 (H29.11)
 - ・稲盛記念館の寄贈 (H30)



いたいと願っています。

◆地域人材の育成

平成26年には地（知）の拠点整備事業（COC）、平成27年には地方創生の核となる人材が鹿児島で就職し、定着する事業を推進する地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）が文部科学省に採択されました。

本学は9つの学部をもつ総合大学として、地域人材の育成にあたり新しい学部を設けるのではなく、「オーラル鹿大」で人材育成を進める方針を立てました。全学横断で人材を育てるしくみが「地域人材育成プラットフォーム」です。プラットフォーム

では、全学必修科目として「大学と地域」を開講し、地域課題解決型の教育を取り入れました。

私自身の体験を振り返っても、現場で実際にインターンシップを体験し、キャリアデザインをしつかり作ることが非常に大切なところだと思います。

◆稲盛和夫名誉博士の多大な貢献

学生が自由に自学自習できるスペースとして新設したのが、学習交流プラザとアクティブラーニングプラザです。

この学生の集う学習交流プラザの中庭に、平成29年3月、稲盛和夫名

誉博士の立像を建立しました。稲盛名誉博士は、本学の経営協議会委員や学長諮問会議委員として運営にご尽力くださるとともに、平成6年には稲盛会館を寄贈いただき、また、卒業生へ稲盛賞を毎年授与してくださっています。

稲盛名誉博士は京都賞の創設者でもあり、国際的に知名度の高い「稲盛哲学」の体現者であらせられます。本学の大学憲章にある「進取の精神を培う」を体現されている卒業生のシンボルであると思います。本学からこんな偉大な方が出ておられることは誇るべき素晴らしいことだと思います、ご本人のご承諾をいただき、立像建立を実現しました。また、学生・教職員や地域の方々との交流の場として、今年10月の竣工を目指し、稲盛記念館の建設も進められています。さまざまな形で大学を支え、貢献くださった稲盛名誉博士に対し、深く感謝申し上げる次第です。

◆学長職に際して

学長職は、非常に重責です。重責だからこそ、健康維持に努めました。その中でも、睡眠は大切だと思います。悩みもたくさんあって、眠れないこともありませんが、できるだけ熟睡できる環境を整えようと考えていました。そ

れから、体を動かすこと。運動は、わずかでも良いので、時間を見つけて、ジムで汗を流しました。土曜日の午前中は、地域の住民の方々とのソフトテニスサークルで交流し、心身ともリフレッシュさせていました。

大学改革について思ったように進められなかった部分もありますが、ここまで多くのことを推進できたのは、理事の方々、副学長、学長補佐、そしてその方々を支える教職員の方々、いろいろな方のアイデアとサポートのお陰と、心より感謝しております。

◆研究(国際水準の研究、大学の特色を活かした研究)

- 研究推進機構の設置 (H29)
 - ・医用ミニブタ・先端医療開発研究センター…前臨床研究を主眼とした重点的研究課題の推進
 - ・国際島嶼教育研究センター…アジア・太平洋に広がる島嶼域を対象にした教育・研究の推進
 - ・難治ウイルス病態制御研究センター…HTLV-1、HIV-1、肝炎ウイルス等の難治性ウイルスの診断・予防・治療に関する研究の推進
 - ・研究支援センター…高度先端研究機器・設備、遺伝子実験、動物実験、RIを活用した教育研究の支援
- 組織改革
 - ・URAセンターの設置 (H26)
 - ・歯学総合研究科附属南九州先端医療開発センターの設置 (H30)
 - ・理工学研究科附属天の川銀河研究センターの設置 (H30)
- 重点領域研究課題 (H25)
 - 島嶼、環境、食と健康、水、エネルギー
- 全国初の2大学による共同研究センター設置
 - 熊本大学とのヒトレトロウイルス学共同研究センター設置 (H31)

鹿児島大学の未来に向けて

中学・高校を除き、小学校から鹿児島大学に関わりがありました。当時の附属小学校が、また、西駅（現鹿児島中央駅）の西側にあった頃です。小学校の頃は、よく鹿児島大学農学部農場に遊びに来ていて、ガラス製の温室がたくさんあり、中にあちろんな小さなポットを載せるトロッコに乗って遊んでいました。もちろん、大学の関係者に、怒られたり、追っかけられたりしましたが、良い子ども時代を送らせてもらったなと感じています。

私が、大学進学を考えていた当時、東京オリンピック開催に向けて非常に盛り上がっていたこともあり、初めは、土木・建築の技師になりたいと考えていましたが、その後、縁あって農学の道に進むことになったのも、子どもの頃農学部農場で遊びまわった経験が影響している部分も少なくないかもしれません。皆さんご存じのとおり、鹿児島大学には、稲盛和夫さんという偉大な先輩がいらっしゃるって、今なお、本学に対し様々なご協力とご支援をいただいています。

私自身、小学校く学長と長期間、思い入れの強い鹿児島大学に関わることができて、非常に感謝しています。教職員、学生の皆さんにも、この厳しい変革の時代にあっても、本学での経験を誇りとして感じていただきたい。そのことが愛校心へと繋がっていく、第2、第3の稲盛さんへと続くことを期待しています。

前田芳實



平成30年11月に鹿児島市内で行われた明治維新150周年記念パレードの様子（中央が前田学長）。七高（本学の前身）時代の服装に身を包み、パレードを行いました。学長が手にしている「薩摩辞書」の小道具は、学長の手作りとのこと。

（前田学長推薦の漢詩） 桂林莊雜詠示諸生

広瀬淡窓

休道他郷多苦辛（いうことをやめよ たきょうくしんおおしと）
同袍有友自相親（どうほうともあり おのづからあいしたしむ）
柴扉曉出霜如雪（さいひあかつきにいずれば しもゆきのごとし）
君汲川流我拾薪（きみはせんりゅうをくめ われはたきをひろわん）

故郷から離れた地での勉学が辛いなどと言うのはやめなさい。一枚の綿入れを貸し合う友人がいて、自然とお互いに親しくなるのだから。明け方に粗末な扉を開けて表に出ると、霜が一面に降りてまるで雪のようだ。（朝食の支度のため）君は川で水を汲んできなさい。私は薪を拾って来るとしよう。

広瀬淡窓（1782 - 1856）江戸時代後期の儒学者、漢詩人

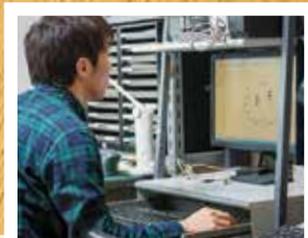
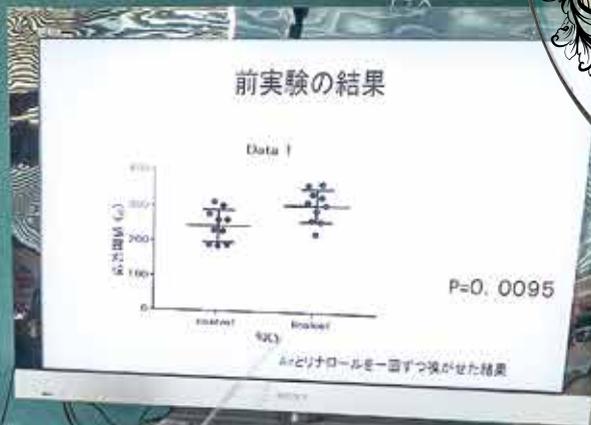
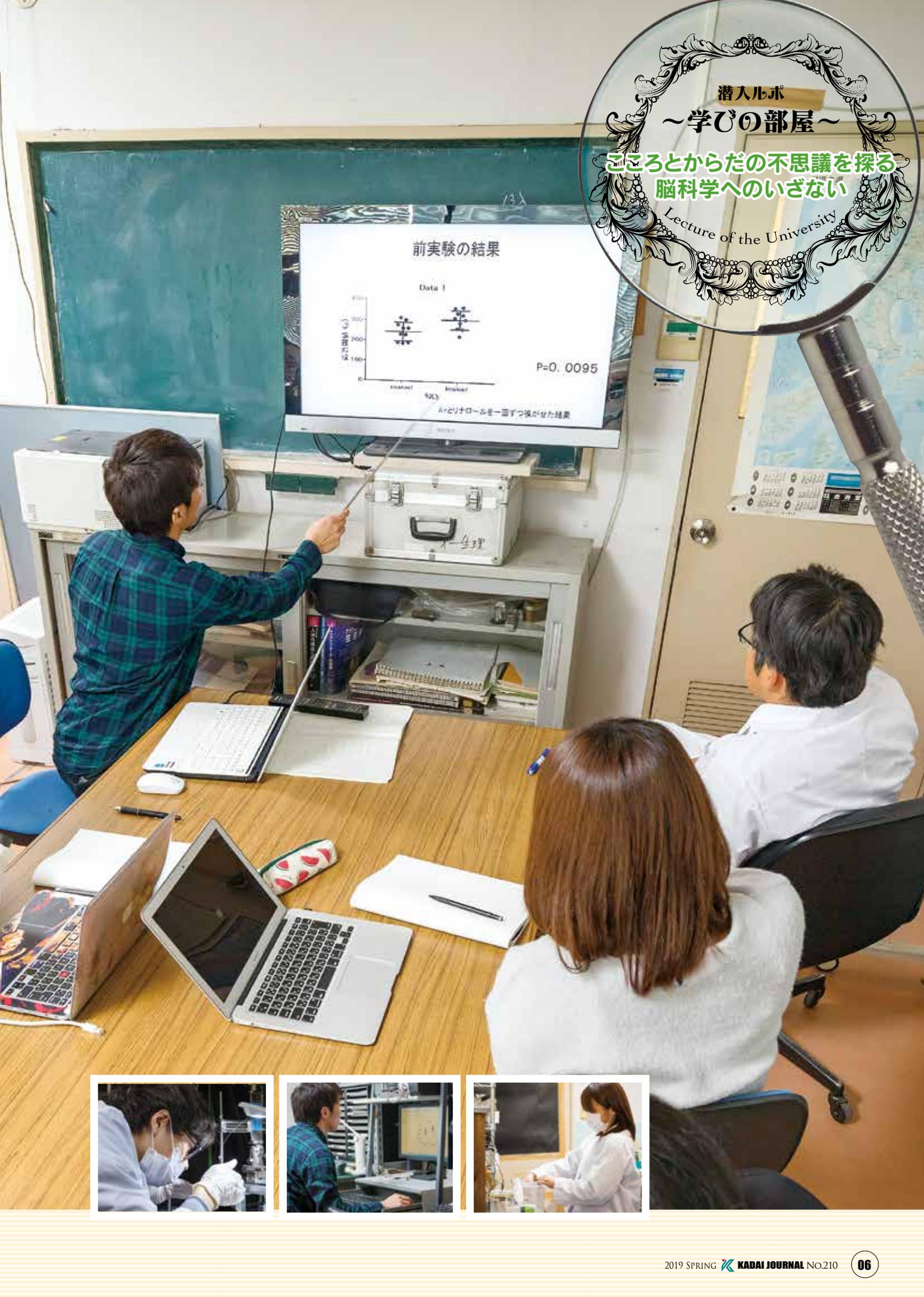
◆管理運営(ガバナンス改革・大学マネジメントの改善)

○ガバナンスの強化

- ・人事・給与システムの弾力化
- ・学部長等の学長任命制度の確立 (H26)
- ・学長補佐体制の強化
- ・監事機能の強化 (H26)
- ・学術研究院の設置 (H27)
- ・大学改革検討会議の設置 (H28)
- ・男女共同参画の推進(さつつん保育園の設置) (H30)

○マネジメントの改善

- ・学習交流プラザの設置 (H25)
- ・キャンパスマスタープラン2015の策定 (H26)
- ・鹿大「進取の精神」支援基金創設 (H27)
- ・稲盛和夫基金の創設 (H30)
- ・ネーミングライツ（命名権）に関する基本方針の策定 (H28)
- ・長期改革プラン「2030年の鹿大」の策定 (H30)



「医学・脳科学入門」(共通教育科目)

大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
生体機能制御学 統合分子生理学

桑木 共之 教授
楠本 郁恵 助教
柏谷 英樹 講師
山下 哲 助教

「心臓にあると思われていた心は、じつは脳の作用。脳がなかったら心が生まれない。動物にも心があることがわかってきたので、動物をモデルにして調べることで、心の実態を脳の働きとして明らかにしようという学問」。脳科学分野の研究が解きあかそうとしているものについて、統合分子生理学研究室の桑木共之先生はこう語る。

ニユーヨークタイムズも注目の脳科学研究室

統合分子生理学研究室には桑木先生、柏谷先生をはじめ4名の教員が在籍。遺伝子操作マウスや脳の光操作、行動生理学、生化学など幅広い技術を組み合わせ、脳と身体の関係を探求し、学内他分野や他大学と連携を図りながら数々の業績をあげている。2018年には本学の侵襲制御学研究室との共同研究により、ラベンダーなどに含まれる香気成分(リナロール)が不安を軽減する作用を持つことと、その基盤となる脳神経回路を発見。研究成果はオンライン科学雑誌に掲載されたほか「The New York Times」など各国メディアに取り上げ

られ、世界的注目を浴びた。

この研究室に身を置いて、学生が自らのテーマに沿った実験を行い、学びを深めることができるのが「医学・脳科学入門」。実験テーマは、教員のアドバースのもと、各自の興味に沿って設定する。実験動物の取り扱いや機器の利用法、統計、脳機能評価法など実験の基礎的知識、技術の習得もカリキュラムに組み込まれており、高校の生物習得程度の基礎知識があれば文系理系を問わずに受講することができる。

一歩先を歩く科学者による、学びの伴走

2018年度後期講座の最終日に行われたプレゼンテーションを見学させていただいた。発表は、各自取り組んだ実験について、その動機と方法、結果、考察などを述べ、それについて教員らが意見を交わし、学びを深めていくというスタイルだ。

医学部保健学科看護学専攻3年瀧ヶ平拓哉さんの研究テーマは「リナロール香気の馴れによる鎮痛効果の変化」。リナロールの鎮痛効果のメカニズムについては2016年、柏谷先生らの

研究によって明らかになったが、効果の持続時間、副作用や有害性の有無など、臨床現場での実用化へ向けて二歩踏み込んだ研究は現在も続けられている。瀧ヶ平さんの実験もその一角をなすもの。「鎮痛薬はドクターの処方が必要ですが、匂いを嗅ぐだけで鎮痛効果が現れるのであれば、患者さんが痛みを訴える度に看護行為として介入できるのではないかと思ったのが実験の動機です。本当に匂いを嗅ぐだけで鎮痛効果が現れるのか最初は半信半疑でしたが、実験マウスでの鎮痛効果で自分の目で観察した時は驚きでした」。そのほかの学生もそれぞれのテーマに沿った手法を自ら探り、実験を行った。

自主的探究心を育む おおらかな気風

学生の発表の合間には、先生たちからの率直な講評が入る。「ネズミを環境に慣れさせる時間をとることも必要だよね」「前の動物の匂いを完全に消した方がいいんじゃないかな」「大き

く外れた一匹のデータが平均値を引っ張っちゃってるね。その個体は何か特別な違いがあったのかな?」。実験の進め方や手技、グラフの表現、仮説の立て直しなど、自らの経験をもとに科学する心を伝える先生たちの、温かく真摯な姿が印象的だ。失敗は間違いではなく、次への二段階であるというメッセージが言外に伝わってくる。

行動観察に関心を抱き受講した水産学部水産学科1年生の景山理菜さんは「実験がうまくいかず、途中でテーマを変更したこともありましたが、自主的に進めることができて面白かったです」と話す。研究室では、同様の授業「医学・行動心理学入門」を夏期にも集中実施。「脳科学に興味があれば、この授業を機に学びを深めてほしいと思います。教員はできる限りサポートします」。学部・学年を問わず知的探究心旺盛な学生を歓迎している。

Profile



桑木 共之 (くわき・ともゆき) 教授

大学院医歯学総合研究科 先進治療科学専攻
生体機能制御学 統合分子生理学
[学位] 博士(医学) 東京大学
[所属学会] 日本生理学会、米国生理学会、日本神経科学学会、米国神経科学学会、国際自律神経学会
[専門分野] 自律神経生理学
[研究テーマ] 〇循環・呼吸・体温・代謝調節の神経機構とその分子メカニズム 〇無意識の自律機能調節と意識的行動とのインターフェイス



錦江町副町長

三反田 みどり(さんたんだみどり)

鹿児島県出身。1988年鹿児島大学法文学部法学科卒業。鹿児島県庁入庁。商工労働水産部水産振興課主幹(兼)水産流通対策係長、企画部交通政策課主幹(兼)幹線交通係長等を経て2017年4月より商工労働水産部産業立地課課長補佐(企業誘致担当)。2018年4月、錦江町へ副町長として出向。



ごくありふれた学生生活を過ごしましたが、振り返ると、講義を受ける中で
 人生の軸となる「思考の基礎」を授けていただいたことに気づきます。

大 隅半島南部に位置する農水産業のまち、

錦江町で副町長を務める三反田みどりさんは、本学法文学部の卒業生です。女性が活躍できる環境づくりや、緑茶をはじめとする農水産物の活用などのマニフェストを掲げる木場一昭町長の要請に応え、2018年4月県庁から出向しました。

「産業振興や企業誘致への関わりにおいては女性としての特質が求められることはありませんが、日頃発言の場が少ない地域の女性の声を引き出すには、女性同士であれば垣根が低くなるという面はあると思います」。三反田さんは、

就任してすぐに町内全地域で「副町長と語る会」を開催。その活動を通じて出会った女性達と交流を重ねているうちに、いつの間にか自然発生的に「錦江町異業種おもしろ女子会」が立ち上がっていました。また、錦江町のお茶をはじめとする地域農水産物のブランド力を高めるため、各地から講師を招いてセミナーや

勉強会を開くなどの取り組みを積極的に行っています。「限界集落の厳しさについて新聞などで読んで知っているつもり

でしたが、実際に地域を訪れると、頭だけではなく心に響いてくるものがあります」。地域の未来をつくるのは一過性のプロモーションではなく、人材育成が大切だと話します。

「人の気持ちが変われば、世の中は変わります。私自身も楽しみながら、共に学びを深め、伴走型の支援を目指しています」。長年、県職員として産業振興に携わってきた経験から得た思いです。

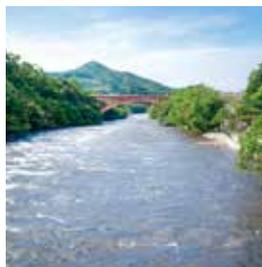
現在、地域のリーダーであると同時にサポーター役を務める三反田さん。どんな大学生だったのか尋ねると「とくに大志を抱くこともなく、単位をとるため授業に出て、友達とおしゃべりして、アルバイトでお小遣いを稼ぐ、ごくごく普通の学生でした」と、はにかんだ笑顔が返ってきました。ですが、「普通」に過ごした日々の中で、人生の軸となるものを築くことができた

のも学生時代、と振り返ります。「先生方から思考の基礎となるものを授けていただきました。とりわけ教養課程で

受けた郷土史や心理学、民俗学などの授業では、自分たちの精神文化や思考の背景、ここに生きる意味を学ばせていただきました。後から気づいたことですが、また、講義の中で勧められて読んだ丸山眞男や亀井勝一郎の本からも大きな学びを得ました」

自らの学生時代を振り返り「学生時代は人生の基礎をつくる、贅沢な投資の時間。考えるの根幹になるような本をたくさん読んでほしいと思います。可能であれば時間に余裕のあるうちに海外へ出てほしい」というのが若い世代へのメッセージです。「地域を見て、海外を見て、自分はどうか生きる？ということをその都度判断していくと、それぞれの人生がそれぞれ価値のあるものになっていく気がします」。地域社会の中で、一人一人の人の存在の大きさを実感しながら日々を過ごす三反田さんの実感です。

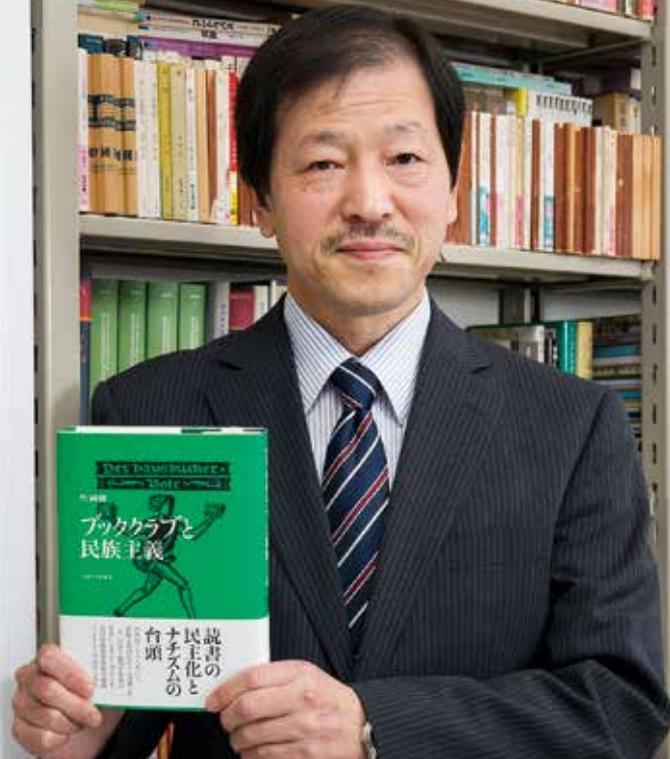
先輩からのメッセージ



研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW



文学研究と書籍研究を架橋する独自の研究手法によって ドイツにおけるブッククラブの軌跡と功罪について解明

～ユニークな視点と手法による研究の集大成『ブッククラブと民族主義』をめぐる～

竹岡健一先生は、ドイツのブッククラブに関する網羅的な研究を本邦で初めて行った。著書『ブッククラブと民族主義』は、流通面に着目されがちなブッククラブという共同体を、思想空間形成の契機としてとらえるというユニークな視点と資料的価値が高く評価され、2018年、日本出版学会賞を受賞。文学と出版・流通という側面から「本」にアプローチする、新しい学術分野のパイオニアとして知的探究を深める竹岡先生の研究活動について伺った。

読書の「民主化」への貢献

ブッククラブは、出版社とのライセンス契約のもとで本を安価に製造し、書店を介した通常の書籍販売とは異なるルートで販売する会員制の書籍販売組織。ドイツにおいては19世紀前半に最初のブッククラブが誕生し、第一次世界大戦終結後の1920年代に入ってから10団体から52団体へと急増した。戦争によって中産階級が貧しくなり、安い本への需要が高まりました。また当時、識字率も上がって知識欲が高まり、労働運動や女性の社会進出も進んだ。さまざまな歯車がかみ合っただけでなく、ブッククラブが世の中に受け入れられたのです。

会員制で直接販売、安価という特色は各団体に共通していたが、販売する本の内容は団体によって異なり、中立的な世界観に立つ市民を読者に持つブッククラブのほか、政治的、文化的、宗教的な内容の書籍を販売する団体も数多く存在した。本の購入と読書

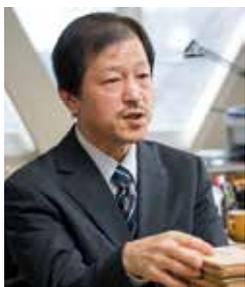
の習慣が広がる「読書の民主化」に多大な貢献をなすと同時に、文学作品の仲介にきわめて大きな役割を果たした、とブッククラブの「功」について竹岡先生は解き明かした。

ナチズム浸透への加担

一方、民族主義的な思想の普及に利用された組織もあった。ドイツ民族商業補助者連合という団体によって1916年に設立されたドイツ家庭文庫がそれである。ドイツ民族商業補助者連合は、卸売業や銀行業等の経営主任や帳簿担当者など、知的労働者を自負する職業人の集まりで構成され、排他的で前近代的な倫理観を旨としていた。この団体を母体とするブッククラブ「ドイツ家庭文庫」は、郷土文学や戦争肯定的な文学、民族と深く結びついた作家とその著作を擁護。「本の定期購読団体にとどまらず、民族主義的、反ユダヤ主義的、反共産主義的な保守的改革プログラムの一角を



Scholar Interview



竹岡健一教授

法文教育学域法文学系
法文学部人文学科多元地域文化コース

Profile 竹岡 健一(たけおか・けんいち)
九州大学大学院文学研究科博士後期課程 独文学専攻 1989年3月中退博士(文学)・九州大学2004年3月
■所属学会:ドイツ語学文学国際学会(IVG)、日本独文学会、日本出版学会
■専門分野:ドイツ文学、出版学
■研究テーマ:○ドイツにおけるブッククラブの発展と社会的役割
○ナチズムとドイツ文学のかかわり ○第二次世界大戦中のドイツにおける前線兵士への本の供給

担っていた」と竹岡先生は分析する。1933年のナチス政権発足後、ドイツ民族商業補助者連合自体は解体されたものの、ドイツ家庭文庫はナチスの出版部門として活動を継続。第二次世界大戦開戦当時、発行雑誌には戦争の情報やナチズム礼賛などが掲載された。

ナチス登場以前に民族主義が勃興した背景には、当時の不安定な社会情勢が無関係ではなかった。「第一次世界大戦での敗戦、不平等なベルサイユ条約締結など、ドイツ国内には不満がうっ積し、民族主義が再燃する素地があった。とくに大学生ら若者の右傾化が著しく、リベラルな共和制やワイマル憲法が否定され、反資本主義、反ユダヤ主義、反カトリシズムなどが噴出した。ナチスが政権を取った時、若者らは熱狂したのです」。ナチスによる文芸・文化政策についての研究はこれまでも行われたが、ブッククラブの活動を通じてナチズムが浸透し、ナチスの政権獲得につながっていったこと

文学研究と書籍研究の架橋

が竹岡先生の研究によって明らかになった。

竹岡先生の研究は、ドイツで行われている「書籍学」の知見を生かし、ドイツの大学や図書館に所蔵される膨大な資料を渉猟し、包括的に検証を進めるという手法が取られた。書籍学とは、書籍の印刷、普及・販売、受容を主な対象として学際的な考察を行う学問である。研究は、いわば文学研究と書籍研究を架橋する試みである。1945年以前に存在した52ブッククラブ全てについての緻密な調査が網羅された点も、資料としての価値を高めている。

若い世代にもっと本を読んでもほしいと竹岡先生は話す。「実体のつかめない電子空間の情報で暇をつぶすより、古典的名作を二冊でも多く読んでほしい」。読み物としての本、物としての本、その両面から本へのアプローチを続ける先生からのメッセージだ。

研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW

人をまもり、自然をまもり、美しい自然環境を次世代へ。 先端技術を活用した研究成果を惜しみなく地域社会へ還元

～2018年度海洋立国推進功労者(内閣総理大臣賞)表彰・海上保安庁長官表彰～

西隆一郎先生率いる海岸環境工学研究室は「海岸を護る、人を守る、環境を守る」を合言葉に、海岸環境工学の教育・研究・社会貢献活動に長年携わっている。近年は、東日本大震災の災害支援を通じて導入したドローン(Unmanned Aerial Vehicle /無人航空機)の高度な運用技術を基に、活動の幅を広げ、海岸環境の調査・研究のほか災害支援やウミガメ保護活動など、先端技術を活用した公益的な活動に積極的に取り組んでいる。

沿岸域の持続的な 発展に貢献

わが国の沿岸域は、豊かな魚介類や美しい景観に恵まれている一方、台風や高潮、津波など自然災害もつきものだ。東日本大震災を例にとると、海岸の砂浜や砂丘が消失し、リアス式湾など海底環境が変化した。また貝毒の多発とホタテ養殖の減少が見られ、特に福島県海域では利用者が激減した。沿岸域の復興のためには、災害、人、自然、技術をトータルに組み合わせた長期間にわたるアプローチが求められている。海岸保全(防災・減災)と環境(生態系)保全、利用(親水活動・漁業)という三つの視点を調和させつつ、沿岸域の持続的発展に貢献する科学的アプローチを行っているのが西先生率いる海岸環境工学研究室である。西研究室では、わが国の水圏に関する課題をテーマにした多岐にわたる研究に取り組んでおり、各地の復興支援においても大きな貢献を果たしている。

先端技術開発の二翼をも担う

調査・研究にあたり、西先生はGPSや3Dレーザ測深器、赤外線カメラなど時代の先端技術をいち早く取り入れてきた。そして2011年に起きた東日本大震災をきっかけにドローンを導入。ドローンの登場は、調査・研究活動に多大な恩恵をもたらした。ドローンで撮影した地形や建物などの写真は、ソフトを使うことで、俯瞰したかのような三次元データの作成を実現。また、時系列に沿って撮影することで、時間経過による変動情報を表すことも容易になった。

またドローンは、水難事故防止を目指す西先生が長年注力しながらも、安全面から断念せざるを得なかった離岸流(遠浅の海岸で発生する沖への強い流れ)の調査再開を実現した。例えば、海に色のついた水を流してドローンで撮影することで、海中で人が危険にさらされながら調査せずとも水の動きを可視化する

Scholar Interview



ドローンで撮影した位置情報で再現したウミガメ(写真ではありません)



鳥の目で俯瞰できるドローンは研究に福音をもたらした



西隆一郎 教授

農水産獣医学域水産学系
水産学部水産学科水産生物・海洋学分野



Profile 西 隆一郎(にしりゅういちろう)
昭和61年3月 鹿児島大学大学院工学研究科修士課程海洋土木開発工学専攻修了、博士(工学): 鹿児島大学理工論第4号、平成11年1月
■所属学会: 土木学会、海洋学会
■専門分野: 水産海洋学、沿岸環境学、海洋工学
■研究テーマ: ○海岸環境 ○沿岸域の流れ ○底質 ○海岸保全 ○海岸侵食 ○水産海洋学に関連する問題 ○海砂採取 ○海跡湖(インレット) ○モニタリング ○水圏GIS

ことができるようになった。危険な区域に人が踏み入れることなく定量的データを収集することができるツールの普及は、科学者にとって大きな福音だと先生は言う。「ドローンには怪しいイメージを抱く人もいますが、天体望遠鏡や顕微鏡と同じように観察技術の一つです」

西研究室では、さまざまな地形や気象条件下におけるドローン運用技術のノウハウを蓄積。災害支援や環境調査のほか運用技術の教育・啓発活動など、全国各地で幅広い局面において技術を提供している。一方、ドローンの可能性を生かし、海の表面だけではなく海中・海底を撮影する技術や、赤外線を用いて見えなものを可視化する技術の開発にも携わっており、先端技術の進化を牽引している。

次代の研究者育成と幅広い啓発活動

長年にわたり、幅広い社会貢献活動を行ってきた西先生は2018年度海洋立国推

進功労者(内閣総理大臣賞)表彰および海上保安庁長官表彰を受けた。「これまで一緒に研究活動に従事した研究者や学生、ともに救難活動に従事した方々の顔が浮かびます」。今後の抱負は「沿岸域の環境保全と海岸の安全利用の研究を行いながら、次世代の研究者を育てること」。大学をはじめとする国内の研究機関に、若い研究者のポストが増えることも西先生の願いだ。

本誌が発行される頃、西先生は指宿市池田湖で「イッシーを探そう」というプロジェクトを開催する予定だという。約5年前、学内外の研究者らとともに着手した池田湖の底質調査の再開だ。「イッシーと言われたものの正体が見つかりそうなんです」。技術の進化が、また一つの謎解きを可能にするかもしれない。水温む季節を前に「日本は海に囲まれているので、もっと海のことを勉強して楽しく海とつきあってほしい」と、西先生は結んだ。



かぎん未来創造プランコンテストで学生・大学院生が大賞等を受賞

第2回かぎん未来創造プランコンテストで、歯学部4年の尾林 莉咲さんが大賞の「未来創造プラン大賞」を、理工学研究科1年の須藤 順平さんと同1年の松田 翔太さんのチームが次点の「グッドインベーション賞」を受賞しました。

かぎん未来創造プランコンテストは、独創性のあるビジネスプランを持つ学生や教職員を発掘することを目的として、鹿児島銀行および九州経済研究所が主催するもの。優秀なプランについては、事業化に向けた支援を行うことで、地域活性化およびベンチャーマインドあふれる人材の育成を目指します。選考基準はプランの新規性・独自性、実現可能性・成長性、事業化へのパッションや表現力などで、第2回となる今年度は29件の応募の中から、1次選考、2次選考、最終選考を経て各賞が決定しました。

尾林さんは「利用者本位を目指す訪問歯科診療特化型プラットフォームの提供」というプランで、須藤さん・松田さんのチームは「ばけっとろいど〜スマートフォンで簡単!本格ロボットプログラミング!〜」というプランで、それぞれ受賞しました。皆さんの今後の活躍が期待されます。



エボラウイルス病に対する治療薬候補となる新規化合物を同定

～米国Texas Biomedical Research Instituteのバイオセーフティーレベル4 (BSL4) 実験施設を用いた国際共同研究の成果～

難治ウイルス病態制御研究センターの馬場昌範教授と外山政明特任助教は、Robert A. Daveyボストン大学教授〔前Texas Biomedical Research Institute (TXBiomed) 教授〕、櫻井康晃 長崎大学特任研究員(前TXBiomed研究員)、榊原紀和 徳島文理大学講師らと、TXBiomedのバイオセーフティーレベル4 (BSL4) 実験施設を用いた国際共同研究により、エボラウイルスの感染を強く阻害する新規化合物を同定することに成功しました。

本研究成果は、2018年11月3日に国際専門学術誌「Antiviral Research」のオンライン版に掲載されました。

エボラウイルス病(通称、エボラ出血熱)は、エボラウイルスが人に感染することで引き起こされる非常に致死率の高い感染症ですが、未だ認可された治療法はありません。2013年から2016年には西アフリカにおいて11,000人以上の死者を出し、現在もコンゴ民主共和国においてアウトブレイクを起こしており、早急な治療薬の開発が切望されています。

馬場教授らは、エボラウイルス病患者において弱いながらも一定の治療効果が示唆された抗マラリア薬であるアモジアキンに着目し、その抗エボラウイルス活性を増強するために、当時研究室に保有していた約70種類の誘導体を、以前より抗エボラウイルス薬に関して共同研究を行っていたTXBiomedに送りました。TXBiomedではDavey教授と櫻井研究員が、それらのエボラウイルスに対する活性を、同研究所のBSL4施設において、培養細胞に用いて検討したところ、アモジアキンよりも活性の高い複数の化合物を同定しました。

また、それらの化学構造を解析したところ、特定の2か所の構造を変えることで、細胞に対する毒性を増強させることなく、抗エボラウイルス活性のみを増強出来ることを明らかにしました。そこで、それら2か所の構造を同時に変えた一連の化合物を榊原講師が新たに合成したところ、より強力な抗エボラウイルス活性を持つ化合物を複数同定することに成功しました。

今後は、本研究において同定された化合物の治療効果を動物実験によって検証する予定であり、既に試験用薬剤の準備も完了しています。動物実験によって効果が確認されれば、既に本学とTXBiomedで国際特許も共同出願済であることから、エボラウイルス病に対する新規治療薬の開発に繋がると期待されます。





[寄稿] 樟寿会便り

第16回目となる平成30年度鹿児島大学樟寿会総会・懇親会が、平成30年11月17日に鹿児島市で開催され、45名の会員が参加しました。

総会は、吉田浩己会長の挨拶に続いて、中村雅磨会員(平成15年退職)を議長に選出して議事に移り、活動報告、平成29年度会計報告が承認されました。その後、鹿児島県工業倶楽部副会長の門久義会員から、本会の社会貢献への試みとして「地場企業の活力支援プロジェクト」についての提案がありました。また今回の総会では、鮫島吉廣先生(鹿児島大学客員教授)による特別講演「西郷どんと焼酎、そして造士館」がありました。

総会後の懇親会には、鹿児島大学から前田芳實学長、島秀典理事(総務担当)、野澤知弘総務部長が来賓として出席されました。来賓挨拶で前田学長は、「鹿児島大学の現状と将来展望」について、国立大学は厳しい財政状況に置かれているが、稲盛和夫京セラ名誉会長の多大の支援などを有効に活用して、鹿児島大学の教育研究の質の向上に努めたいと話されました。

御年95歳で福岡県糸島市から参加された田代一男会員(平成元年退職)の乾杯のご発声で開宴した懇親会では、和やかな歓談に花が咲き、鹿児島大学ブランド焼酎(8銘柄21本)が当たる「お楽しみ抽選会」などで大いに盛り上がり、会場は楽しい雰囲気になりました。最後は、鹿児島大学と樟寿会の益々の発展を祈念して、伊牟田經久会員(平成8年退職)による万歳三唱で盛会のうちに会を閉じました。

なお、「鹿児島大学樟寿会メーリングリスト」が、鹿児島大学のご厚意で利用可能になりました。メールアドレスを開示いただいた会員は、このメーリングリストへのアクセスができます。樟寿会では、会の情報の伝達や会員相互の交流などで活用していきたいと考えています。まだメールアドレスを開示していない会員も、ふるって樟寿会 竹田靖史幹事長(連絡先が不明な場合は、鹿児島大学総務部総務課総務係 ssoum@kuas.kagoshima-u.ac.jp)までご連絡ください。



「米国から鹿児島、そしてアジアへ 多極化時代の三極連携プログラム」キックオフシンポジウムを開催しました

グローバルセンターは、2018年12月5日、「米国から鹿児島、そしてアジアへ 多極化時代の三極連携プログラム 大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」キックオフシンポジウムを開催いたしました。本プログラムは、文部科学省「2018年度大学の世界展開力強化事業～COIL型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」に採択された10事業のうちの1つです。2018年度から2022年度まで文部科学省の支援を受け、オンライン国際協働学習(COIL: Collaborative Online International Learning)を活用し、鹿児島をアジアの玄関口として、米国7大学・アジア諸国8大学と三極連携で、教育・学生交流を行うものです。

シンポジウム会場の稲盛会館キミ&ケサメモリアルホールには、自治体関係者、一般市民、学生、教職員など約180名の参加者がありました。プログラムに加わる海外連携大学から8名の招聘教員が参加し、シンポジウムでは全て英語を使用して、日本語の同時通訳を配するなど国際的な場となりました。

冒頭、前田芳實学長の挨拶の後、グローバルセンター中谷純江教授による本事業の概要説明に続き、「島嶼へき地医療コース」、「環境建築デザインコース」、「食料生産コース」、「食の安全コース」、「日本文化論コース」、「食と健康コース」、「ナノバイオコース」、「臨床獣医学コース」の8つのコースを担当する米国の大学、アジアの各大学、鹿児島大学の教員によるコース説明が行われました。最後に本プログラムに参加する海外招聘教員7名をパネリストに迎え、COILを視野に入れた三極連携の双方向交流によって生まれる教育的効果、並びに三極連携の扇の要「アジアの玄関口」として鹿児島大学に望むことについてディスカッションの場を設け、活発な意見交換を行いました。

日本と海外をCOILで結ぶことによって、本学の学生と海外の学生が共に学ぶ機会を創出する目的の本プログラムに対し、参加者からも大きな期待が寄せられていることが、参加者アンケートの意見などからも感じられたシンポジウムになりました。



「天の川銀河研究センター」設置記者会見および記念講演会を開催しました

大学院理工学研究科附属組織として「天の川銀河研究センター」を1月1日に発足させました。これを受けて、1月12日、記者会見および記念講演会を開催しました。

天の川銀河研究センターは、太陽系がある「天の川銀河」を集中的に研究する世界的水準の学術研究拠点として設置され、理工学系の研究者を中心に、医歯学系などを含む研究者15名で構成されます。記者会見では、半田 利弘天の川銀河研究センター長（理工学研究科教授）が、「これまで本学で個々に取り組んでいた研究を組織化して国内外に発信することで、研究の活性化をはかりたい」とセンター設置の経緯や目的等を説明しました。

その後、前田 芳實学長、本間 俊雄理工学研究科長、岡村 浩昭理学部副学部長、半田 利弘センター長らが銘板除幕を行い、新しいセンターの設置を祝いました。

会見後は、稲盛会館にて一般市民を対象とした記念講演会を開催しました。国立天文台の本間 希樹教授と半田 利弘センター長による講演が行われ、小学生や高校生を含む参加者が熱心に耳を傾けていました。講演後は、会場から多数の質問が寄せられるなど、宇宙や天文に対する参加者の関心の高さを伺わせる講演会となりました。



南九州先端医療開発センター設置記者会見・キックオフシンポジウム開催

大学院医歯学総合研究科に「南九州先端医療開発センター」を新設し、1月15日、設置会見およびキックオフシンポジウムを開催しました。

南九州先端医療開発センターは、本学の基礎研究で創出される創薬・医療機器・再生医療製品等のシーズを、実用化（産業化）まで切れ目なく研究開発することを目的とし、2018年度に医歯学総合研究科内に新設したものです。創薬に代表される先端医療開発・実用化の研究は、学術的に高い意義があるだけでなく、地域にバイオ創薬の企業・産業を創出することができれば、極めて大きな社会貢献にも繋がるという高い将来性・可能性を持っています。

会見では、前田 芳實学長が「医療分野の研究開発においては、一貫したマネジメントや専門知見に基づく研究支援など高度の専門性が要求されます。本センターの設置が、本学の地域貢献活動をより一層推進していく契機となることをお約束します。」と挨拶を述べました。次いで、佐野 輝医歯学総合研究科長の挨拶、小戩 健一郎南九州先端医療開発センター長によるセンター概要の説明が行われ、「当研究科では、これまでトップレベルの研究がなされてきましたが、その成果を社会に還元する仕組みが十分整備されていない現状がありました。今後は本センターが中心となり、学内・学外の機関との連携・協力により、創薬及び医療機器のシーズの効率的な実用化を目指します」と、発表しました。

会見後は、医学部鶴陵会館ウィリアム・ウィリスホールにてキックオフシンポジウムを開催しました。第一部では、日本の革新医療の橋渡し・臨床研究を牽引されている、国立研究開発法人日本医療研究開発機構の井本 昌克先生、九州大学病院の中西 洋一先生、京都大学医学部附属病院の清水 章先生ら3名の先生による講演が行われました。第二部では、本学から2名の教員が登壇し、小戩センター長が本センターの概要と研究推進プロジェクトについて、井戸 章雄臨床研究管理センター長が同センターの取り組みについて講演しました。参加した学内外の関係者や教職員は、医歯学総合研究科の有望な研究シーズの可能性と大学病院での臨床研究の支援体制を理解し、さらに今回の新センター設置による研究の推進加速と社会貢献・地域貢献への大きな可能性に期待を寄せつつ、シンポジウムは終了しました。





教育学部附属小学校 「ソニー子ども科学教育プログラム」最優秀校受賞

教育学部附属小学校は、公益財団法人ソニー教育財団の2018年度「ソニー子ども科学教育プログラム」において、応募総数172校の小・中学校の中から最優秀校2校のうちの1校に選定されました。1月19日、東京都港区のソニー株式会社本社にて贈呈式が開催され、担当教諭らが出席しました。

このプログラムは、「日本の発展には子どもたちの科学教育こそ重要」と唱えたソニー創業者の井深大氏が1959年に始めた教育支援活動で、全国の小学校・中学校・幼稚園・保育所・認定こども園から教育実践論文を募集し、特に優れた取り組みに対して表彰を行っているものです。

教育学部附属小学校の受賞プログラムでは、感性、創造性、主体性に基づく生き生きとした子どもの姿に迫るため、「自然に浸り、もっと夢中になる学び」というテーマの下に、【教科プロジェクト】、【連携プロジェクト】、【環境プロジェクト】という3つのプロジェクトを立ち上げました。そして、表出した子どもの姿から取組の成果と課題を分析し、次年度は、『鹿児島島の自然に親しみ、学びの価値を実感する鹿大附小プラン2019』を構想しています。



鹿児島大学トップセミナーを開催

2月14日、東京大学大学院数理科学研究科特任教授で、Arithmer(アリスマー)株式会社代表取締役社長兼CEOの大田佳宏氏を講師に招いて、「AI Smart Robot Network」と題したトップセミナーを開催しました。

少子高齢化・地域格差・貧富の差などの課題を解決し、一人ひとりが快適に暮らせる社会の実現(Society 5.0)のためには、AIやIoTなどの最新テクノロジーの活用が重要となります。講演では大田氏から、次世代OCR処理、静止画像・動画からの物体識別、言語処理、統合データベース、高機能ロボット、人体の画像探査、義歯の画像解析など向けに独自開発したAIシステムによる事業展開と、最先端の現代数学でAIの可能性を切り開いていることについて話がありました。

講演終了後の質疑応答も活発に行われ、参加者した教職員にとって極めて有意義なセミナーとなりました。



大学院連合農学研究科が設立30周年記念行事を開催

2018年11月30日、稲盛会館キミ&ケサメモリアルホールにて、大学院連合農学研究科設立30周年記念式典および記念講演会を盛大に開催し、国内外から約180名が参加しました。

大学院連合農学研究科は、1988(昭和63)年、佐賀大学・宮崎大学・鹿児島大学が連合して設置した独立博士課程大学院です。その後、琉球大学の参加と宮崎大学の離脱を経て、昨年、設立30周年を迎えました。現在は佐賀大学・琉球大学・鹿児島大学の3大学が、九州・沖縄を中心とした自然環境の保全や生物資源の持続的な利用を目指し、幅広い教育と研究を行っています。また留学生の受け入れも積極的に行っており、豊かな国際性も特徴となっています。

記念式典は、前田芳實鹿児島大学学長による式辞の後、初井和朗鹿児島大学連合農学研究科長がこれまでの経過を報告しました。続いて構成大学を代表し、宮崎耕治佐賀大学長代理の後藤昌昭理事、大城肇琉球大学学長、および小幡泰弘文部科学省高等教育局専門教育課長代理の飯塚智久教育振興係長が、30周年を迎えた当研究科への祝意を表明するとともに、将来、学生が農林水産学分野のトップランナーになることや、農林水産業の指導者として活躍することへの期待を述べました。

式典後の記念講演会では、当研究科で学位を取得し、世界各国の第一線で活躍する方々にご講演いただきました。お話しいただいたのは、インドネシアで最も権威ある大学の一つであるボゴール農科大学にて学長を務めるArif Satria学長、スリランカで最も権威ある大学の一つであるスリジャヤワルダナプラ大学のSampath Amaratunge総長、スマトラ・ウタラ大学のMohammad Basyuni准教授、中国科学院植物研究所の王亮生教授の4人の先生方です。連大に対するそれぞれの思いと将来の展望について述べられました。また、元鹿児島大学連合農学研究科長で鹿児島大学名誉教授の杉元康志九州栄養福祉大学教授は、連大の歴史と今後の期待について述べられました。参加者は、農林水産業の分野で世界的に活躍する登壇者たちの講話に、熱心に耳を傾けていました。

講演会終了後は、鹿児島サンロイヤルホテル(鹿児島市)にて祝賀会が開かれました。平成の時代とともに歩んできた同研究科が、これからも、日本はもとより国際社会で先導的に活躍できる人材を輩出すること、また、来る50周年に向けてますます発展していくことを祈念し、記念行事は終了しました。





進め！ 鹿大生！ STUDENT INTERVIEW

第2回かぎん未来創造プランコンテストで「未来創造プラン大賞」受賞
「利用者本位を目指す訪問歯科診療特化型プラットフォームの提供」

おぼやし
尾林莉咲さん

(歯学部歯学科4年生)



歯学部生としての経験と意欲から生まれた課題解決型プランを提案 ～勇気を振り絞って挑んだチャレンジでつかったこと～

尾林さんが発表したのは、訪問歯科診療を希望する患者側が、自身の体調に合わせて適切な治療を行うことのできる歯科医院を検索できるシステム構築のプランです。「お口のケアが全身の健康に大きな影響を与えることは最近の研究でも明らかです。寝たきりの患者さんのQOL（生活の質）を上げるためにも訪問歯科診療の認知度を上げていく必要があるのです」

訪問歯科診療の普及は高齢化社会における喫緊の課題ですが、クリアするべき問題も少なくありません。その一つは患者の全身疾患への対応。「寝たきりの患者さんは糖尿病や高血圧などを抱えていることが多く、歯科医には専門的知識と技術が求められます」。持参した道具だけで治療に当たる訪問診療は「撃たれることのない野戦病院みたいなもの」。尾林さんは往診に同行した体験をもとに語ります。

「プラン作成にあたっては杉浦教授、濱田先生（鹿児島大学口腔外科）、訪問診療に携わる機会を与えてくださった有馬院長（あおぞら歯科）をはじめ多くの方にお世話になりました。受賞は周りの方々のお陰です」。その熱いまなざしは、プランの実現という次の目標へ注がれています。

座右の銘

「本当の失敗は、チャレンジしないことだ」

子どもの時に住んでいたアメリカで感じた疎外感も、大学受験での度重なる失敗も、私の中で大きな挫折感になっていました。自信をつけたくてコンテストにチャレンジしようと思ったのですが、ダメだったら本当に自信を失ってしまうのではないかと怖かった。その時、どこで見ただれの言葉かはわからないけど、ふとこの言葉が浮かんできたんです。最初の書類審査に通った連絡があった時は、もう達成感を半分以上味わった感じがして泣きました。恐怖心を乗り越えて企画書を提出したことが、私にとって一番のチャレンジでした。



さっつんが行く!

鹿大キャンパス漫遊記

SATTUN's Campus Sketches



鹿児島大学公式マスコットキャラクター

さっつん

Vol.12

鹿児島大学総合研究博物館 標本収蔵庫

本学における諸分野の研究活動を通じて集められた学術資料を収集・整理・保管し、教育・研究に活用することを目的として2001年に設置されました。

全国の国立大学法人の中でも有数となる約50万点の学術標本が収蔵され、その内訳は魚類15万点、植物15万点のほか考古学、地質学に関する標本まで多岐にわたっています。

学内はもとより国内外の諸研究機関への収蔵品貸し出しを積極的に行っているのも本博物館の特筆すべき特徴。全世界の大学博物館の実績をしのぐ年間5000点もの標本・資料が国内外の教育・研究活動に貢献し、本学所蔵の標本を活用して上梓される論文は年間100本に上ります。

年々増加する学術標本に対して手狭な収蔵スペースの拡充が、目下の課題となっています。



📷 今号の表紙「鹿児島県鳥瞰図」

今号の表紙は、学長室に飾られている鹿児島県土を描いた絵画がベースとなっています。

鹿児島大学は、「南北600km これが私たちのキャンパスです」をキャッチフレーズとして、広大なフィールドを最大限活用した地域貢献出来る大学を目指しています。そのスタンスを具現化するため、前田学長の依頼を受け、教育学部桶田教授が制作しました。縦1,090×横3,790mmのサイズの大きさと、一瞬衛星写真ではないかと見紛う緻密なタッチ、そして、絵の具の盛り上がりによる陸地の起伏が再現されるなど、壮大な中にも繊細さが垣間見られます。

